

10月は「滋賀県ちいさな企業応援月間」

小規模企業をはじめとする中小企業（ちいさな企業）は、地域の経済や社会の担い手として大変重要な役割を果たしていただいております。滋賀の経済や社会が今後発展していくためには、その主役である「ちいさな企業」の活性化が不可欠となっております。

そこで、県では10月を「滋賀県ちいさな企業応援月間」として定め、さまざまな関係者が連携し一体となって、情報発信や支援策、諸活動等を積極的に実施します。

事業の詳細については、滋賀県のホームページをご覧ください。左記へお問い合わせください。



◆問い合わせ先

滋賀県商工観光労働部
中小企業支援課
☎077-528-3733
FAX077-528-4871
メール：fb00@pref.shiga.lg.jp
ホームページ：http://www.pref.shiga.lg.jp/f/chusho/

10月は、臓器移植普及推進月間です

— 自分が助ける側にも、助けられる側にもなる可能性があるから —

臓器移植待機者のうち、1年間で移植を受けられる人は、わずか20%といわれています。臓器提供について一人ひとりが家族と話し、意思を伝えておきましょう。

※臓器提供意思表示カードを希望される人は、保健センターまでお越しください。

※臓器移植に関する問い合わせ先

(公社) 日本臓器移植ネットワーク

フリーダイヤル 0120-078-11069

http://www.jotnw.or.jp

臓器提供意思表示カード

厚生労働省・(公社)日本臓器移植ネットワーク



ドナー情報用全国共通連絡先 0120-22-0149

臓器移植に関するお問い合わせ先：(公社)日本臓器移植ネットワーク
フリーダイヤル 0120-78-1069 http://www.jotnw.or.jp

第79回国民スポーツ大会 第24回全国障害者スポーツ大会

愛称・スローガン募集します

最優秀賞(各1作品) 賞金 5万円
優秀賞(各3作品) 賞金 1万円
※入賞者が中学生以下の場合には賞金相当額の図書カードになります

2024年に滋賀県で開催する第79回国民スポーツ大会・第24回全国障害者スポーツ大会は、時代を担う人育てや、活力に満ちた真心通い合う郷土づくりに県民総力を挙げて、夢や感動、連帯感を共有できる大会とすることを目指します。

この大会の機運を高めるため、広く県民に愛され、滋賀の魅力を県内外に発信できる大会の「愛称」と「スローガン」を募集します。

1. 募集作品

①愛称 親しみやすく呼びやすい、滋賀県らしさあふれる言葉で表した、両大会の名称・呼び名。「滋賀」国スポ・障スポ」の文字を必ず入れてください。

②スローガン 大会に向けた思いや開催基本方針で目指す大会を印象

づける言葉・キャッチコピー。

2. 募集期間

平成30年10月1日(月)～
11月20日(火)

3. 応募方法

郵便(チラシはがき、FAX、インターネット)で応募ください。
郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号、職業(学校名・学年)、「愛称」または「スローガン」をお書きください。

4. 応募・問い合わせ先

〒520-0857

滋賀県大津市京町四丁目1番1号
(滋賀県県民生活部スポーツ局
体・全国障害者スポーツ大会準備室内)

第79回国民体育大会・第24回全国障害者スポーツ大会滋賀県開催準備委員会

愛称・スローガン募集係

☎077-528-1332

FAX077-528-4832

ホームページ

温故知新

日野歴史探訪

私たちの住む日野町には、52の大字があり、それぞれの地域が豊かな自然と歴史文化でいろどられています。

温故知新では、町内各大字の歴史と代表的な文化財をシリーズで紹介していきます。

大字鎌掛 その1

大字鎌掛は日野町の南東部に位置し、その呼び名は莊園の役人である「鑑懸」に由来するとも、山の神に二又の木を掛ける掛神信仰に由来するとも言われています。

古代から中世の頃は、日野谷一带に広がっていた日野牧の一部でした。永正10年(1513)、本願寺九世実如が専明寺に下付した絵像の裏書に「日野牧秘佐郷鑑懸」と記されており、当村の地名を見ることができます。この頃、村の東にそびえる城山には蒲生氏がその居城を築きました。

古くは一之瀬村と鎌掛村に分かれていましたが、江戸時代の初期に鎌掛村となり、以来、昭和30年に日野町となるまでの約300年間、行政的に一村一字として独立した稀有な存在でした。

江戸時代には御代参街道の宿場として発達し、多くの日野商人を輩出

しました。

当地には、国の天然記念物である鎌掛谷のホンシヤクナゲや屏風岩、重要文化財である正法寺の宝塔をはじめ貴重な文化財が数多く残されています。

光明寺の地獄のご絵さん

数ある鎌掛の文化財のうち、今回は「地獄のご絵さん」として親しみ恐れられてきた光明寺の地獄絵を紹介いたします。

「地獄」とは、悪行をおかした人間が送られる死後の世界のこと。平安時代の高僧・源信が『往生要集』で八大地獄について紹介し、広く知られるようになりました。八大地獄は、等活・黒繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・無間からなり、生前に犯した罪の軽重によってそれぞれの地獄で責め苦を受けます。鎌倉時代以降、源信が説いた八大地獄の様子が「往生要集地獄变相図」と



第九幅 無間地獄 もっとも罪深い者が落ちる地獄。目を背けたくなくなるほどの生々しい描写がなされている

して絵画化され、民衆にも普及しました。

光明寺に伝わる「地獄のご絵さん」は、八大地獄に閻魔王界と無間別地獄を加えた全十幅からなり、罪人が鬼の責め苦にあう様子が凄惨に描かれています。

一般に各地に残る地獄絵は、絵師が描いたものを購入した事例が多いのですが、光明寺の地獄絵は当寺

第八世の住職が描いた貴重なものです。

住職の名は諦眼、現在にも続いている本堂・鐘樓を整備した当寺中興の祖であるとともに、画技にも優れた人物で、十数年の歳月をかけて文政6年(1823)に自ら地獄絵を完成させました。また諦眼は華道にもすぐれ、池坊の門弟となつて麓坊を名乗り、東海・関東地方にまで、家元の代役として華道指南に赴くほどで、湖東を代表する文化人でした。諦眼の足跡は、当時の日野の文化力の高さを如実に物語っています。

この貴重な「地獄のご絵さん」は四年に一度の虫干会で公開されており、今夏が公開の年にあたり大勢の参詣者で賑わいました。次回公開は2022年の夏。今回見逃された方は、ぜひ次の機会にご覧ください。